

ハムリン・ガーランド『ダッチャー農場のローズ』

——文明批判から受容へ——

山下 勉

(1998年12月2日受理)

Hamlin Garland は、自らの故郷である中西部農村を創作舞台として19世紀末のアメリカ資本主義の急速な発展の中で置きざりにされて経済的困窮に苦悩する農民像に焦点を当てアメリカ文明の矛盾に異議を唱えてきた。しかし1895年の *Rose of Dutcher's Coolly* 『ダッチャー農場のローズ』(以下『ローズ』と略す)をもって、いわゆる「転落」と称される「ロッキー・マウンテン物」を扱うロマンス作家へと方向転換をした結果、『ローズ』は数少ない長編の中で唯一評価を受け、且つ中西部と関連を持つ最後の作品となった。さらに創作期間が、1890年末の着想から、93年の作者のシカゴへの移転による中断期を経た後の再開と5年近くの時の経過を考え合わせると『ローズ』自体に既に方向転換の必然性が内在されていると考えられる。

『ローズ』のテーマである女性問題に対する関心の原点に母の存在があることは各批評家の指摘するところである。¹⁾ 即ち苦悩する一家、特に母の存在が、生来楽天的、ロマンテックな「開拓農民の息子」であった作者は「土地単一税」を提唱する Henry George を信奉する「社会改革者」へと覚醒し、東部のお上品な伝統と決別する「リアリスト」の道を歩む最大の誘因であった。よって中西部を創作舞台とした時、女性問題は当初より必然のテーマとして存在し、主に短編で取り上げてきたのである。この意味においても『ローズ』は作者の変質過程の最も有効な指標ともなりえよう。

『ローズ』では従来の女性像とは異なった、詩人として「真の芸術 (true art)」への到達による社会的自立と、男女対等の結婚観に基づく「契約結婚 (limited matrimonial partnership)」をするローズをもって「新しい女性像 (new woman)」を提示した。最初“A Father's Love”のタイトルの短編での構想は、中西部片田舎の娘のより広い世界への脱出願望と手元に留め置きたい父親の愛情との相克にあった。中断の後95年6月から作品舞台を大都会シカゴに移し、統一テーマを親子関係から田舎娘の成長、成功物語へと発展させた小説に完成させたのである。²⁾ 『ローズ』前半では田舎での少女ローズの成長物語であり、その中では Bray も「女性の自由と性の認識 (feminine free-

dom and sexual awareness)』³⁾と指摘するように、女性の性の目覚めと葛藤が人格形成の過程と共に描かれる。性は1895年の時点においては、公立図書館より排除される目に会うなど非常な非難を浴びた。⁴⁾ (『ローズ』後半のシカゴでは、ローズの詩人として「真の芸術 (true art)」への到達による社会的自立と、男女対等の結婚観に基づく「契約結婚 (limited matrimonial partnership)」が焦点となっている。

「性」や「契約結婚」にみる時代を先取りする進歩的概念にも関わらず、前半のローズ像創造への肯定的評価に対し、後半の「新しい女性像」には留保意見が大勢を占めている。Pizer は Howells の「ガーランドは「彼の計画と教訓 (his “scheme” and “lesson.”)」のために人物の自由な行動を犠牲にした」との批判を踏襲して「活気がなく機械的 (wooden and mechanical)」と評する。⁵⁾ Carter も作者の目的がローズの自立と自由の獲得にあることを認めた上で「結婚の内容が語られれば、その観念はもっと説得力を持ったであろう」⁶⁾と不満を述べている。押谷氏も「大きな瑕疵」として Carter を引用しつつ「この問題点の困ってきたところは、つまるところ、新しい女性像および理想的な結婚像を披瀝したいという作者カーランドの意欲が前面に出すぎて、登場人物の自由な動きが後方に押しやられたことにある。言い換えれば、作者の関心の大部分が彼自身の理念の伝達に向けられ、登場人物をその理念に従わせようとする余り、彼らの自由な動きを拘束し、結果的に彼らを生きた人間としてではなく、単に作者の理念の代弁者に仕立て上げてしまったことである。」⁷⁾ Bray も同様の立場で「ガーランドはローズの愛する人をもっと中身のある人物 (a more solid character) にできなかった乃至しようとしなかったためだけに失敗した」と人物創造の失敗に帰している。⁸⁾

いずれにしても否定的評価は「新しい女性像」の理念の概念化に集中している。事実前半の大人への成長過程に認められた内面の欲望、苦悩、葛藤や緊張感が希薄となり、理念の未昇華の批判は妥当なものであろう。とすれば作者は社会的慣習に抗して女性の権利を主張する、言い換えれば社会の現実に対するラディカルな姿勢を取り続けていたが、創作上理念が先走ったために十分昇華仕切れなかったことになる。

ガーランドが、女性が経済的に自立を獲得することで、男女対等の関係に立ち、精神的にも自由な、解放された「新しい女性像」を提示しようとする意図は論争の余地はない。しかしながら理念の概念化を批判することよりも、概念化という結果になった理由の検討の方が必要である。作者がどのように女性問題を把握してきたか、経過のなかに「新しい女性像」を置いてみれば「新しい女性像」に込めた作者の別の意図が明らかになるのではないかと考えられるのである。

1

『ローズ』後半の「概念化」の前に「契約結婚」が何故理想となる結婚なのかを明らかにする必要があるだろう。次の一節は『ローズ』前半のローズの少女時代の結婚を巡る客観的状況を、農村の娘達の一生を概略することで説明している。愛に夢を抱いた若者達は、総じて早婚であるが、結婚による社会的責任を担った結果は、早くして肉体的にも精神的にも若さを喪失して「だらしなくて、無頓着な夫」と「痩せて青白く愚痴っぽい妻」となっていくごとく、結婚が決して幸福な未来を保障するものでないことは明かである。

Most of the girls were precocious in the direction of marriage, and brought all their little allurements to bear with the same object in view which directs the coquetry of a city belle. At sixteen they had beaux, at seventeen many of them actually married and at eighteen they might often be seen riding to town with their husbands, covered with dust, clasping wailing babes in their arms; at twenty they were often thin and bent in the shoulders, and flat and stiff in the hips, sallow and querulous wives of slovenly, careless husbands. (83)

『ローズ』のテーマが「経済的不公平」よりも「社会的慣習」⁹⁾に移るとのパイザーの指摘を待つまでもなく、時の経過で「経済的不公平」が減少すると共に、かつての悲惨な状況も暫時影を潜めて背景へと退きつつある。しかしその基本構造は依然として同質である。さらにローズ5才の時の母の死を、台所で倒れて「死んで休息を取った (and took rest in death.)」(4)とさりげなく語られる一文を加えることも出来よう。この言葉は死のみが休息である農夫の妻が置かれた状況を象徴するものとして繰り返されてきたもので、ローズの背後には、自然主義的経済環境支配の存在を認めないわけにはいかない。

『ローズ』前半では、ガーランドは「社会改革者」として、女性問題を経済的観点より把握する従来の姿勢を維持している。女性問題の核を結婚にあるとする。即ち、経済的奴隷に等しい状況下では、女性にとっては結婚を「馬の引き具 (harness)」¹⁰⁾と例えたごとく決して逃れることの出来ない拘束と見たのである。

現実に組み込む結婚を転回軸として「馬の引き具」のために人間性を喪失していく女性の様を、精神錯乱、絶望、諦め又は夫婦間の理解による忍耐等々色模様に描き挙げてきた。又は結婚までの情感豊かな少女時代と対照させることでその経済環境支配

の存在を提示，告発してきたのである。

そこでローズが環境支配から脱出して「新しい女性」へと成長するために付与されたのが「自然児」としての性格である。「まぎれもない自然の子 (a veritable child of nature)」「自由で束縛されない精神 (a free and uninhibited spirit)」「動物の生命力と生まれながらの自由な精神 (animal vitality and natural freedom of spirit)」¹¹⁾と各批評家が一樣に指摘するように、「自然児」としての動物的な生命力と自由な精神が、何事をも旺盛に追求し、慣習に捕らわれず、美的感受性の原動力となるのである。

当然「性」も又「自然児」の一部である。「性」が結婚願望と脱出願望との内的葛藤を強調し且つその葛藤に説得力を与える役割を担うのである。結婚願望も単に観念的な愛ではなく「その年頃の大多数の少年少女を捕えて、破滅的な早婚に導くただ盲目的な情熱の支配 (the clutch of mere brute passion which seizes so many boys and girls at that age, and leads to destructive early marriages)」(62)、「女性の情熱 (woman's passion)」(145) が一体となっている。自由を求める脱出願望も「破滅的な早婚」(125) への恐怖と表裏一体のものである。いずれにしても結婚を核とした葛藤に外ならない。

田舎から「破滅的な早婚」から逃れ、脱出願望を果たした後も「女性の情熱」との葛藤は以前にも増して緊張の度合いを強めるものとなるのであるが、結婚による拘束の内容は「経済的不公平」に代わって「社会的慣習」である。ホーソンの『緋文字』にふれて、「男性はそのような体験を経て成長するが、女性は天使のごとく潔白か悪魔のごとく邪悪かのどちらかである」(126) と、当時のヴィクトリア的女性像を強要する「二重の規範」を知らされたのは、ローズが「ほとんど婚約」(123) までいく若き法律家からであった。「二重の規範」を抱える男性支配の社会では、「男性が女性に要求する太古からの犠牲に身を投げ出すこと」(140) であるように、結婚が女性の自立と自由にとって「拘束」であるとのローズの認識に変化はない。ローズに与えられる「結婚するな」の助言の合唱は、単にローズの認識ではなく現実の姿であることを示す。ローズが相手に求めたのは、何よりも「仲間意識 (comradeship)」であった。「拘束」のない結婚である意味において「契約結婚」は最も理想に近いのである。

「契約結婚」の相手 Warren Mason は、シカゴの一流ジャーナリスト、知識人であり、社説により「世論を形成する」(382) 人物であり、且つローズの文学的助言者でもある。「男も女も変わり、いろんな事情に、束縛に、義務にうんざりするようになる」(379) との彼の冷笑的・懐疑的人間観により形成された結婚観は「仲間、恋人として、主人や召使い又は不本意な妻ではなしに (as comrade and lover, not as subject or servant, or unwilling wife)」(380) と夫婦関係において両者の完全に自由に対等な関

係を最優先させるもので、結婚が持つ社会的、法的拘束力に捕われる必要もなく、お互い相手に対して持つ権利も義務も否定する。結婚そのものさえも続ける意志がなくなれば、一方的に解消出来るとするものである。実際にローズの「契約結婚」では、法的、形式的な結婚制度を重視しない姿勢は作品の結末においても二人が法的に結婚したのかを明確にされていない。¹²⁾この「契約結婚」の概念は、今日の観点からすれば、制度が持つ法的権利関係を軽視したこの結婚観は女性の権利保護の面からして否定されるべきであり、またすでに克服された課題であると言えよう。しかし完全な男女平等を主張する結婚観は「1890年代に形成された概念であり」¹³⁾「フェミニストの趣旨」¹⁴⁾に沿ったもので、進歩的な概念である「契約結婚」は、女性の自立と自由の証しである、と同時にその力点は離婚の自由の保障に置かれていることがメイソンの弁からも感じ取れよう。

この結婚観はガーランド自身のものもあった。作品で描いてきたように、女性にとって結婚が「馬の引き具」であるとの中西部農村の現実認識により起因するものであろう。後に自らの結婚においても実践しようとしたが、妻 Zulime Taft の要求の前に「新しい理論 (the new theory)」を捨て従来どうりの結婚をしたと指摘している。¹⁵⁾

ちなみにローズに与えられた他の選択肢とは以下の結婚であった。汚れなき荒野ロッキーで鉱山を所有、「文明を経験してみよう」とシカゴに来ている Owen Taylor の場合。彼は当然女性も自由であるべきだが、女性が本当に自由であるためには労働からも解放されなければならないと考える。牧歌的世界で自由が与えられ、且つ「彼は彼女の主人ではなく、しもべになるだろう」(283)と主従関係が存在するなかで逆転しローズが主となる結婚。

「金は彼のすばらしい性格をだめにしていなかった」(294)と恵まれた環境が良い方向に作用して、率直、品性を備えた大富豪の息子 Elbert Harvey の場合。上流階級の物質的には何の不安もない裕福な生活のなかで文明の恩恵を享受できる結婚、しかし「独立への彼女自身の努力」(358)を放棄しなければならない結婚。

2

シカゴ移転とその後の中断の時期に、ガーランドに如何なる状況の変化があったのか、又どのような影響を受けたのであろうか。作者の「社会改革者」「リアリスト」「開拓農民の息子」の三つの視点は、併存、対立又は補強しながら、時の経過につれ又個々の作品にそれらの濃淡を見せてきたのである。スタート時には「社会改革者」が「リアリスト」より前面に出して、その怒りを直接作品に吐露した。「単一税ストーリー」

と自認し且つ高い評価の”Under the Lion’s Paw”では「説教ではなく、例証すること」¹⁶⁾ 即ち「社会改革者」の主観的立場と「リアリスト」として客観的姿勢を両立しえたとしている。しかしながら「社会改革者」と「リアリスト」との葛藤は、作者が絶えず抱えてきた問題であった。

回顧録 *Roadside Meetings* (1930) にて、30年以上も後という時の経過もあってか「社会改革の熱意が対象とする分野を狭めていった」理由を、People’s Party の崩壊、*A Spoil of Office* の失敗、High Country の発見にあったと率直に語っている。¹⁷⁾

People’s Party の崩壊で言及する社会情勢は、中西部の最悪を極めた農業経済が暫時回復傾向を辿ると共に社会改革運動も鎮静化してきた。主に農民の利益代表として農民連合を発展的に解消し結成された第三政党 People’s Party の1892年の大統領選挙の敗北から96年の民主党吸収への崩壊過程は、この動向を象徴的に示すものである。「社会改革者」として積極的な支援活動をしてきた作者にとって、特に92年の敗北が深刻な精神的打撃であり、社会改革への情熱の減少の原因となったと推察するのは容易である。

しかしその直接且つ決定的な理由は、母親の「救出」のための一家の開拓からの撤退にある。92年冬も両親はサウス・ダコタの農場で苦闘の日々を過ごしていた。年老いて体力的にも精神的にも弱くなった母親に危機感を抱いた作者は、失敗者として退却するのを拒み、さらに西への開拓に成功の場を追い求めていた父親を強引に説得して、母親を言わば「救出」し、一家の開拓史の出発点であるウエスト・セイレムに連れ帰り、親類縁者に囲まれての安住の地を提供したのである。「社会改革者」の出発が、悲惨な状況下に置かれた家族とりわけ母の存在であったことを考えると、一家の開拓史の終了は同時に作者にとっての中西部との関係の事実上のそれでもあったと言っても過言ではない。次のように語るガーランドに一家の引き揚げと共に中西部との関係を締めくくる響きが認められよう。

After nearly a third of a century of migration, the Garlands were about to double on their trail, and their decision was deeply significant. It meant that a certain phase of American pioneering had ended, that “the woods and prairie lands” having all been taken up, nothing remained but the semiarid valley of the Rocky Mountains. —In the years between 1865 and 1892 the nation had swiftly passed through the buoyant era of free land settlement, and now the day of reckoning had come.¹⁸⁾

1893年、93年と「アリーナ」誌より与えられた視察旅行で、ロッキー山岳地帯の未だに文明の及ばない荒野の大自然に、「その美しさの中で、私はすべての社会的使命を、すべてのむさくるしい、気むずかしい年月を忘れた。——さらにその社会的状況に対して責任を感じなかった。」¹⁹⁾と吐露するように、「High Country」の発見は「開拓農民の息子」の再現の場であり、「社会改革者」からの逃避への誘惑であった。実際に「社会改革者」の減少に反比例して一層表面化してくることになる。

他方アリーナ誌の編集長 Benjamin O. Flower の支援の元に中西部農民運動を背景にした *A Spoil of Office* では「社会改革者」の展望が困難な状況下にある客観的現実認識に立ちながらも主観的にはその信念を強く表明していた。その失敗に創作上の動揺を受けたことは察せられるが、ガーランドは最大の原因が「演説者」「主唱者」であり過ぎ、「芸術性 (artistry) を欠いた」即ち「論争的な面が小説を駄目にした。政治的な議論に深入りし過ぎた」²⁰⁾ 点にあったと見るのである。

「社会改革者」と「リアリスト」との立場の葛藤は作者が当初より絶えず抱えてきた問題であり、「革新的 (radical)」で創設まもない「アリーナ」誌の編集者 Benjamin O. Flower と「貴族的 (aristocratic)」な一流誌「センチュリー」の編集者 Richard Watson Gilder, Bowman の言葉を借りれば「社会的・倫理的良心 (social and ethical conscience) と美的良心 (aesthetic conscience)」²¹⁾ との関係で取り上げられるところである。

しかし93年夏のシカゴ博覧会時点では、その文学会議で“Local Color in Fiction”のタイトルでヴェリテズムの主張をし、Mrs. Mary Hartwell Catherwood との間で、秋まで続いた所謂リアリズム対ロマンス論争を引き起こすなど、「リアリズムの主唱者の一人」の姿勢を堅持している。²²⁾

Pizer は、ガーランドが1894年出版者 Stone への手紙で「*Crumbling Idols* をもって「論争的な作品 (his controversial work) を終わりにすると述べている」ことを指摘している。²³⁾ McCullough も Pizer を踏まえて「結婚における女性の権利やアメリカンインディアンの苦境のような「論争的な社会的テーマ (controversial social themes)」は扱い続けたが、——*A Spoil of Office* のような「論争的な経済的小説 (controversial economic fiction)」にはもはや焦点を当てなかったことは明白であるようだ」²⁴⁾ と説明する。実際「論争的な経済的小説」は書いていないが、「論争的な社会的テーマ」であるはずの「結婚における女性の権利」が、ガーランドにおいては「論争的な作品」ではないのかという基本的な疑問が生ずる。前半の「性」は伝統的道德観に基づいているとはいえ、当時の社会通念を考慮するなら取り上げることで自体がタブーであり、よって激しい非難を浴びる「論争的」要素を理解していないはずはない。しかし『ロ

ーズ』後半を前にして「論争的な作品はかかない」発言は、もはや「結婚における女性の権利」は「論争的」でないことになる。というよりもこの認識の上に、後半は成立していることになる。

他方、ガーランドは創作活動の場としてのシカゴへの期待を抱いていた。アメリカ文明の発展を誇示する世界博覧会の開催を間近に控えたシカゴは、「マグネット」と形容されるごとく中西部全域を集約する商業の中枢としてニューヨークをも凌ぐ急速の発展を遂げ、アメリカ資本主義を象徴する「最大の都市 (the Napoleon of the cities)」の位置を占めようとした。作者はこのシカゴを“Here flames the spirit of youth. Here throbs the heart of America,”²⁵⁾ と賞賛し、又博覧会にも“I was amazed at the grandeur of “The White City,”and impatiently anxious to have all my friends and relations share in my enjoyment of it”²⁶⁾ と無条件に賛美している。「将来の文学的中心としてのシカゴへの確信は世界博 (1893年) が大々的になるのと共に深まった (my belief in Chicago as a future literary center deepened with the growth of its World’s Fair.—)」²⁷⁾ とアメリカの文化的中心への期待を表明している。大井氏もこのガーランドの姿勢に、「地理的・農業的フロンティア」の消滅に変わって「都市的・産業的フロンティア」に、アメリカの未来を見出そうとする進歩の信奉者を見て取られている。²⁸⁾ かつて激しい文明批判を繰り返してきた作者からは想像しがたい変身振りである。しかしながらこれをもって作者の文明一辺倒の礼賛を意味するものではない。作者とてシカゴの発展の実態が物質至上主義にあることを無視しているのではない。物質至上主義の存在を十分認識した上で、それを克服する文化の出現を、しかも「時間だけの問題だ、しかもほどなく (a question only of time, and of a very short time)」²⁹⁾ と期待したのである。

何よりも「High County」の発見によって生来の「開拓農民の息子」の比重が増していた。その憧憬をローズの詩に投影していたとうりである。「汚れなき荒野」の住人にして「最も高潔な精神の持ち主」(283) たるオーエンをして「しかし文明は同時に非常な苦しみももたらす (But civilization carries such terrible suffering with it.)」(219) 語らせる作者の姿勢に、大自然への傾斜と文明への懸念を容易に認めることが出来よう。

「リアリスト」の姿をかいま見ることできる。ローズがシカゴに「マグネットに引きつけられる鉄粉」のごとくに鉄道で入っていく際の様相は、5年後のキャリー・ミバー (Sister Carrie) が見たそのものである。各地域からの人々、各階層の人々で溢れかえり、喧騒に満ち、戦場のごとき様相を呈する通り、家並み、住む人々の特徴、「都市のあちら側は彼女を恐れさせ、こちら側は彼女を圧倒し畏怖の念を催させる」

(197) と下層・上流社会階層の存在とその貧困と繁栄の際立った対照，それぞれに醸し出される雰囲気，臭いに至るまで，作者はリアリステックに描写する。しかしながら，彼の選択は，Walcutt が「都市の生活のむさ苦しい要素が汚れない田舎娘に与える結果を自然主義的に取り扱うために設定されている。——しかし行動へと具体化されることがない」³⁰⁾ と惜しむように，キャリアをして物質至上主義と正面から格闘するドライサー，更には労使の対立と食肉工場労働者の悲惨な実情を告発するアプトン・シンクレアらの視点とは明らかに異なるのである。

都市・田舎観の変化も必然的結果と言える。従来は田舎と都市は対立する存在であり，しかも都市は田舎を虐げる存在であった。“Up the Coulee”のワードをして語らしめるごとく，都市の論理を支配するのは弱肉強食の非情な競争原理である。³¹⁾ *A Spoil of Office* 時点でも，「君は都市はそれ自体よいものと思っているのか？都市は文明を意味していると思っているのだろうか。——都市は悪と犯罪，そして貧困，それにわずかな者のための莫大な富，を意味するのだ。」と都市自体が悪なる存在と見なしていた。³²⁾

しかしながら『ローズ』における「都市」はどうであったか。「今や都市の時代 (the age of cities) である。——田舎で暮らすことは雌牛，オタマジヤクシになることだわ！」(172) と期待に胸膨らませてシカゴを目指すローズの姿勢は当然としても，引き留めることの出来ない父親も又時代の流れを「進歩の一部 (a part of progress)」(178) として宿命と甘受する。メイソンをして，農民をもはや「小説の新しい流派 (the new school of fiction) が説いたように，英雄的な犠牲者 (heroic sufferers)」と見なさない」(391) と語らせる。かつて東部の伝統から独立する「小説の新しい流派」を唱え，「とてもむさくるしい，とても貧しい」開拓農民の姿に「英雄的な犠牲者」像を読み取り，もって文明を告発したのは作者自身のはずであった。「とてもむさくるしい，とても貧しい」「海賊行為のむさくるしさ」と距離を置いて冷淡に語らしめるメイソンを否定しえない作者の姿勢には，必然的に「都市」の認識の変化を認めないわけにはいかない。

“Do you know, I’m no wild lover of the country, and I don’t admire the country people unreservedly. There are exceptions, of course—but my experience with them has not been such as to make them heroic sufferers, as the new school of fiction sets ’em forth. They are squalid enough and poor enough, heaven knows, but it is the squalor of piracy—they do as well as I should under the same circumstances, no doubt.” (391)

作者の「将来の文学的中心」としてのシカゴへの期待が具体化されているのが、ローズの上流志向を無条件に受け入れるイザベル主催の文化サロンであった。それは「文明のあかし (signs of civilization)」(297) たる芸術家や専門職の集まる「シカゴの芸術生活の中心 (the heart of Chicago artistic life)」(295) である。³³⁾ 更に付け加えるならば、彼らの芸術の良き理解者、後援者は、上流階級を象徴するハーヴェイ一家であり、ハーヴェイ氏は農夫の息子から大鉄道会社の重役となり、今やアメリカ全土に影響を与える仕事をしている立身出世の人物、物質至上主義の権化であるはずだが、「思いやりがあり、洗練された態度」「物静かで、心温かで、繊細で」と、富が高潔な人格を作り上げていることが強調されるばかりである。息子にしても「社会的地位の保証と不安のない自由から生じる優雅さと魅力」(301) を備えており、要するに「金は彼の真正な性格を駄目にしていない」(294) のであり、かつての物欲への闘争の痕跡は留めてはいないのである。「物欲に対する戦いの最悪な時期はほとんど終わった」(234) とするメイソンやイザベルの共通認識なのである。このように文明への期待感の上に構築されたのが、『ローズ』後半の「結婚における女性の権利」であると言えよう。よってこの期待感が、現実との対立という「論争的」なることを避けたがゆえに、理念の表明を導くことになったといえよう。

3

メイソンとの「契約結婚」の前提となるローズの社会的自立をもたらす「真の芸術」に込めたガーランドの意図がどこにあるのか。文芸評論集 *Crumbling Idols* の前書きで「この本は若き芸術家に対する因習の束縛を弱めることを意図したものである」と宣言しているように、東部の伝統からの文化的独立を主張し、それに変わる新しいものとして地方色文学を提唱したのである。その主旨は、文学の基準の第一義に「真実」を置き、その方法として「最も熟知するものについて、最も関心のあるもののために書くこと」によって、「自己、自らの地域、自らの時代に対して真実でありうる」からであった。

This is, I believe, the essence of veritism: “Write of those things of which you know most, and for which you care most. By so doing you will be true to yourself, true to your locality, and true to your time.”³⁴⁾

ガーランドはローズの詩の内容を具体的に示して「真の芸術」を例証しているわけ

ではないが、メイソンの「君は詩人だ、自分の声 (your voice) を見つけたね。」(401)との賞賛と認知から、ローズの求める「真の芸術」が「本当の自分、本当の感情、本当に好きなもの (her real self, her real emotions, her real liking)」(220)の発見である。ローズが「芸術家が真に自らのものである芸術 (that art which is verily his) をついに見つけた時に生じるすばらしい平静さ」(375)を感じた、その“verily”が“Veritism”を想起させるように、作者がヴェリテズムの名で主張する自己の再発見にある。そこで改めてローズの本質としての「自然児」が意味を持つのである。懐疑的人間観、女性観の持ち主メイソンがローズに魅了されたのも「自然児」としてのローズの魅力であった。「個性 (character)」を持つが故に「彼女は本質的な女性らしさを失うことなしに「従来タイプの女性 (the conventional)」とは大きく異なっている」(245)のであり、又 最大の美德たる「想像力 (imagination)」を持つが故に「多様性 (variety)」を生み出し「限りない魅力 (endless charm)」(299-300)を有するとの賛美はすべて「自然児」へ向けられたものである。

「自然児」ローズが大都市シカゴから脱出し、再度故郷田舎の熟知する自然に溶け込むことで遂に「あらゆる身近かなもの」が「文学的、芸術的価値」(371)を持つことを発見し、自己の直接体験で得た情感を歌い上げた詩は、自然の再発見に他ならない。よってローズの詩をメイソンは「申し分のない牧歌的 (perfectly pastoral) である」(400)と評価する。批評家達も「18世紀よりの「エマーソンの信念」³⁵⁾と推定する。実作の提示がない以上推定でしかありえないが、重要なのは、自然への賛歌はガーランドの当初よりの「開拓農民の息子」の投影であった。作家覚醒のきっかけとなった最初の旅行で中西部の現実に認めたのは「思い出される美しさと新たな醜悪さの発覚 (a revelation of new uglinesses as well as of remembered beauties)」³⁶⁾であった。当然自然は文明と対立する概念であり「社会改革者」として「自然に責任があるのではない。人間の法律に責任がある (Nature is not to blame. Man's laws are to blame)」³⁷⁾との立場を取り、一方で「開拓農民の息子」としての自然へのノスタルジアとロマンチックに満ちた自然への賛美を抱き続けたのである。この自然への賛美の投影を、ロッキーで鉱山・牧場の所有者、シカゴには「文明を経験する」ために来ている Owen Taylor 像に見る。Owen を実在の荒野の探検家 John Muir と Joaquin Miller の信奉者とし「汚れなき荒野」の住人にして「もっとも高潔な精神の持ち主」として深い共鳴を持って描き出している。彼の求婚に対してローズに「別の状況下では結婚することができた男性」(259)と語らせ、「真の芸術」の追求による女性の社会的自立という創作目的がなければ、相応しい結婚による別のストーリーの可能性を示唆している。事実、後の「ロッキー物」と言われるロマンスに引き継がれて行くところ

ろである。

問題はローズの「真の芸術」に見る「自然」の果たす小説的役割である。作者は「リアリストもしくはヴェリティストは——あるがままについて書くが、最も上手くできたときは、対比 (by contrast) により、あるべき姿を示唆する」と対比の重要性を説く。

The realist or veritist is really an optimist, a dreamer. He sees life in terms of what it might be, as well as in terms of what it is; but he writes of what is, and, at his best, suggests what is to be, by contrast. . . .³⁸⁾

「自然」と「文明」の対比も、スタート時以来文明批判の主要な手法の一つであった。ところでローズの「真の芸術」の達成は「文明の担い手」メイソンへの、すなわち都市、文明への勝利を認めるものであろうか。

And Mason recognizes Rose's triumph over him, over the city, over what he took to be civilization: perhaps it was his life-style that had arrested his artistic development, while the land-magic of the Coolly had given Rose the impetus she needed.³⁹⁾

ローズの「真の芸術」は都市を脱して田舎の自然の中でこそ到達し得たし、又ローズをして語らしめるように、都市の生活は田舎の自然と対比すれば「何と不毛で人工的 (arid and artificial) にみえる」(372)、又逆に「言い様もないほど感受性のない (heroically dull) ようにみえて」、*「田舎においては都市は実在しない又、都市においては田舎は考えられないようにみえる (In the country the city seemed unreal; in the city the country seemed impossible.)」*(373) と表面的には、対極に位置する相いれない存在である。

しかし、ローズの「真の芸術」への過程は、「文明の担い手」メイソンの導きの元に、過去の文学の模倣や追従を放棄することから始まり、「彼女は都市全てのものと共に成長した」(334) と文明の影響を受けて成長してきたことは紛れもない事実である。次の一節は、ローズをして「これこそがシカゴの心であり頭脳である」(226) と感嘆せしめるシカゴ上流階級・知識階級が集合したコンサート体験でのローズの文学への成長を語るものである。その成長が花の開花のイメージに喩えるように、「自然児」ローズの文学の開花が、シカゴの文化的階層という文明の助けによってなされることを示

す例である。

Rose sat in silence. This had been another great period of growth. She could still feel the heat and turmoil in her brain. It was as if upon a seed-bed of quick-shooting plants a bright, warm light had been turned, resulting in instant, magical activity. At her door they put her down, and once more she thanked them. (280)

再度田舎の生活に戻るとローズは、以前の「野暮な習慣やぞんざいな会話」に落ちて、「彼女の詩はその輝き、快活さを失いそれで時々暗く、にがにがしいものになった」、よって「都市と田舎の両方に住むことが出来るならば人生の問題は解決出来ないこともない」(374) のである。ローズの「真の芸術」は都会の洗練さという文明の存在があってこそ、自然の美しさを把握、維持しうるのである。

他方、メイソンの自然に対する意味付けも、ローズの文明に対するのと同質である。

メイソンはシカゴの一流のジャーナリスト・知識人として社説により世論を形成する影響力を持つ「文明の担い手」である。彼を象徴する「冷笑的」な性格は都市文明の経験の豊富さと、それがために懐疑的となりもはや文明一辺倒ではない、と同時にその経験さゆえに文明疲労を起こして活力・独創性を喪失していることを物語るものである。

彼が本来は文学者志望であり、現在も「都市とその生活」を扱う小説を15年間構想しているが、仕事で創造的エネルギーを使い果たし今だに書けずに苦悶しているのはその左証である。しかし彼は文明に対する相反する二面性のなかで、文明の否定に向かうことはなく、本質的に都市の人間であり「文明の担い手」であり続ける。

しかしながら彼の文明疲労を回復させるのは、自然をおいて外にない。都会の真只中で演じられた人間と自然の戦い、ミシガン湖の港での嵐に難破した操舵手の生への不屈の精神を目の前にしてに「いままでのところは僕は漂流していた、これからは帆走するんだ (Hitherto I have drifted—henceforth I sail!)」(349) と一時的にせよ覚醒する。さらにローズの農場で自然の生命力を体感することにより喪失していた創造的エネルギーを得て蘇生し、再度文明に立ち返るのである。

There was something primeval, elemental, in being thus led by a beautiful woman through coverts of ferns and hazel. Every shadow seemed to wash away some stain or scar of the city's strife. He grew younger. (399)

このようにローズの「自然」は文明に、「文明」の担い手メイソンは自然にと、それぞれの存在基盤を保持しながら、同時に相互の影響を不可欠とする相互依存の関係にある。ローズとメイソンの「契約結婚」の背後に含蓄させたガーランドの真の意図とは、田舎と都市、自然と文明との結合にこそあったと言えるのである。しかもこの結合は、社会の実相への現実認識よりも文化的期待に基づいているがゆえに幸せな結合と言えよう。

この「自然と文明の結合」の意図故に、ローズの「自然」は、かつての文明の弊害を照らし出す役割を担わず、又大都市シカゴを前にその「二重の社会規範」を告発するはずの「契約結婚」という進歩的概念も、現実との格闘に向かうことなく、文化的期待に基づく理想の表明を帯びたものになった。

ガーランドは「社会改革者」の意識の減少と「開拓農民の息子」としての生来の脱文明の自然への憧憬との交差の途上で、「新しい女性像」ローズ像創造にて、従来の文明批判から受容へと、その和解を表明したと言えよう。

注

テキストは、Hamlin Garland, *Rose of Dutcher's Coolly* (University of Nebraska Press, Lincoln, 1969) なおこれらの作品からの引用はすべてカッコの中にページ数を記して本文中に示す。

- 1) Charles L. P. Silet, Robert E. Welch, Richard Boudreau ed., *The Critical Reception of Hamlin Garland* (The Whitston Publishing Company, Troy, New York, 1985), Joseph L. Carter, p. 370, Lewis O. Saum, p.354
- 2) Donald Pizer, *Hamlin Garland's Early Work and Career*, (Russell & Russell, New York 1960) p.p.155-6.
- 3) Robert Bray, *The Critical Reception of Hamlin Garland*, p.404.
- 4) Pizer, *Hamlin Garland's Early Work and Career*, p. 165. 作者の方向転換の決心の要因となったときえ述べている。
- 5) *Ibid.*, p. 158.
- 6) Joseph L. Carter, *The Critical Reception of Hamlin Garland*, p. 372.
- 7) 押谷善一郎、『ハムリン・ガーランドの人生と文学』(大阪教育図書, 平成5年) p. 161.
- 8) Robert Bray, *The Critical Reception of Hamlin Garland*, p. 403.
- 9) Pizer, p. 153.
- 10) Hamlin Garland, "A Common Case" *Belford's* 1 (July 28, 1888), p. 191.
- 11) Joseph L. Carter, p. 371., Lewis O. Saum, p. 357., p. 358.
- 12) 1899年版ではメイソンのアパートの管理人に妻であると紹介して法的な結婚を明らかにし、室内での場面を加えたことで二人の間の温かさと親密さを示している。この変更について、Pizer は"a touch of sentiment of the uncompromising thematic severity"を加味していると否定的な評価をしているところである。Pizer, Introduction, xxxiii.

- 13) Joseph L. Carter, p. 372.
- 14) Lewis O. Saum, p. 58. , Joseph L. Carter, p. 370.
- 15) Henry Blake Fuller “The Downfall of Abner Joyce”(1901年)p. 130. フラーは作者のズリーミィとの結婚が都市、富への順応と不可分の関係にあると見ているのである。すなわち Stepen Giles(=Lorado Taft)達は農場出身で都市に順応している「新しいタイプ(new type)」(46)であり、ズリーミィ自身田舎と都市との接着剤の作用をしている。よって作者のリフォーマー放棄の観点からするならば、” Had he married a Delilah and a Beatrice in one?”¹³⁵ と、ズリーミィはペアトリーチェ的愛すべき女性であると同時にサムソンを裏切ってペリシテ人に売り渡したデリラの役割、即ち作者を文明の富と名声志向へと橋渡しの役割を果たした女性でもあるとの認識を示している。
- 16) Hamlin Garland, *Roadside Meetings* (the Macmillan Company, New York,1930)p.125.
- 17) *Ibid.*, p.187.
- 18) Hamlin Garland, *A Son of the Middle Border* (the Macmillan Company, New York, 1962) p. 372.
- 19) *Roadside Meetings*, p.184.
- 20) *Ibid.*, pp.186-7.
- 21) Sylvia E. Bowman, p.20., *A Son of the Middle Border*, p.350.
- 22) Robert Bray, p.392. *Roadside Meetings*, pp.252-256.
- 23) Pizer, p. 151.
- 24) McCullough, *The Critical Reception of Hamlin Garland*, p.63.
- 25) *Roadside Meetings*, p.388.
- 26) *Ibid.*, p.389.
- 27) *Ibid.*, p.262.
- 28) 大井浩二『ホワイ・シティの幻影』(研究社, 1993)pp.100-101.
- 29) “Literary Centers.” *Crumbling Idols*, p.117.
- 30) Charles C. Walcutt, p.226.
- 31) “Up the Coulee” p.74.
- 32) *A Spoil of Office* p.391, Saum p. 350
- 33) この文化サロンは、作者がシカゴ移住後参加した Henry B. Fuller を中心に Lorado Taft, Ralph Clarkson, Bessie Potter, Charles Francis Browne, and Herman MacNeil ら「芸術家コロニー」と言うべきサークルでの体験を念頭に置いたものである。 *Roadside Meetings*, p.268.
- 34) *Crumbling Idols*, p.30.
- 35) Charles C. Walcutt は “Actually, it is the literary tradition of country simplicity and beauty—straight from the eighteenth century—that controls Garland at this point,—” p.22 .Joseph L. Carter は“an Emersonian faith in its metaphysical capability” p.372.
- 36) *A Son of the Middle Border*, p.302.
- 37) *Ibid.*, p.307.
- 38) “Literary Prophecy.” *Crumbling Idols* p.43.
- 39) Robert Bray, p.404.